

# 戦後日本社会における「政治」と『小説新潮』

——創刊号 1947 ～ 1949 年の掲載作品を中心に——

**Political Aspects of Postwar Japanese Society and *Shosetsu Shincho***  
—Focusing on the Works through *Shosetsu Shincho* from 1947 to 1949—

岩 元 省 子

Shoko IWAMOTO

(人間社会研究科 現代社会論専攻博士課程後期)

## 要 約

本稿は、戦後日本社会において創刊された「中間雑誌」『小説新潮』（新潮社）を素材に、創刊号 1947 年 9 月から 1949 年 12 月まで『小説新潮』の戦後日本社会における第一期と時期区分し、「戦後史」の一面をひも解くものである。拙稿において創刊号から 1965 年までを考察対象期間にすえ、『小説新潮』における戦後日本社会の時期区分を巻頭「グラビア」から研究し四期に分けた。それらが第一期創刊号 1947 年 9 月～1949 年、第二期 1950 年～1954 年、第三期 1955 年～1957 年 4 月、第四期 1957 年 5 月～1965 年 12 月である。本研究は、その時期区分に基づき特に第一期に焦点をあて、掲載小説作品から戦後日本社会の「政治」を切り口に省察を行う。中間小説が戦後の読物として文壇、そして出版界で位置づけられるようになった背景には敗戦後の紙不足と人々の娯楽を求める欲求、さらには出版社や作家が商業主義的に大量に作品を創出していく現象の産物と言える。まずは敗戦後、日本社会における出版ブームのさなか、「中間雑誌」『小説新潮』が位置する空間をふまえ、そして最もこの時期に多く作品が掲載された二人の作家、火野葦平と林房雄に注目し彼らを取り巻く同時代の「政治」を分析する。さらに描かれなかったものに何があるのか、その意味することは何であるのかの省察も合わせて提示する。いわゆる戦後の読物といわれる「中間雑誌」の特徴を体現した雑誌として、その象徴的存在から敗戦直後の日本社会の「政治」的側面を『小説新潮』を通して提示する。これまで「中間雑誌」『小説新潮』が歴史学において研究対象史料として扱われたことがないことをふまえると新たな「戦後史」の一助になると考える。

## [Abstract]

This paper analyzes the political aspects of postwar Japanese society through the works published in *Shosetsu Shincho* (Shinchosha Publication Co. Ltd), a publication that is generally regarded as a “middlebrow literature magazine,” placed somewhere between serious literature (*Junbungaku*) and popular fiction (*Taishu-shosetsu*). From its appearance in September of 1947, *Shosetsu Shincho* grew until the mid-1960s as the Japanese people, who had access to few periodicals during the war, desired entertainment. In addition, not only writers and Shinchosha, but also many other Japanese were caught up in postwar commercialism.

In my previous essay, “Historical narratives of postwar Japanese society in ‘Middlebrow Literature Magazines’: Focusing on the gravures of *Shosetsu Shincho*” (2014), I analyzed postwar Japanese society through the gravures in *Shosetsu Shincho* from the time of its first publication until December

1965. This time span can be divided into four periods: September 1947 to 1949, 1950 to 1954, 1955 to April 1957, and May 1957 to 1965. Based on the earlier study, this paper especially focuses on *Shosetsu Shincho's* first publication in September 1947 to December 1949.

First, I analyze the position of “middlebrow literature magazines” *Shosetsu Shincho* in postwar Japanese society. Second, I study the intentions and purposes of writers. Third, I analyze the relationship between Japan’s postwar politics and the general subjects of their writings. This paper provides a new historical analysis of postwar Japanese society through the “middlebrow literature magazine” *Shosetsu Shincho*, since there has been little discourse on this topic and little study of this material.

---

## 1 はじめに

### 1-1 問題の所在

本研究は、「中間雑誌」『小説新潮』を素材に、戦後日本社会を『小説新潮』の掲載作品、創刊号 1947 年 9 月～1949 年 12 月までを戦後日本社会における第一期として新たな「戦後史」の構築を試みるものである。敗戦後における「中間雑誌」の登場は、1947 年 5 月創刊の『日本小説』（大地書房）<sup>1</sup>が最初とされている。中間小説が掲載された雑誌を「中間雑誌」と表現し本稿では扱うが、中間小説という言葉そのものは古くは関東大震災以後の大正時代から使われだしたといわれ、その以外の同様の意味では通俗小説と呼ばれたりもする。文壇における「中間小説」という用語の定義としては、純文学と大衆小説との中間を行く小説という意味で用いられる。文学研究者による中間小説研究はこの二三年で登場<sup>2</sup>してきたばかりであり、歴史学の分野では雑誌から戦後日本社会を叙述する研究は近年盛んに行われている。その一部として例を挙げるなら大衆雑誌の『キング』<sup>3</sup>や『平凡』<sup>4</sup>、論壇雑誌<sup>5</sup>『中央公論』、『文藝春秋』、『世界』などに着目した研究がある。しかし「中間雑誌」を素材に扱われた戦後史研究は、拙稿のグラビアから戦後日本社会の時期区分を提示した「「中間雑誌」が語る戦後日本社会—『小説新潮』創刊号 1947～1965 のグラビアを中心に—」<sup>6</sup>以外まだ研究は進んでいないのが現状のようである。この研究では戦後日本社会の時期区分を四期、1947 年 9 月（創刊）～1949 年、1950 年～1955 年、1955 年～1957 年 4 月、1957 年 5 月～1965 年 12 月に分け省察を行った。第一期のグラビアの主体は主に作家が 9 割占められ残り一割は挿し絵画家たちであり、第一期を「作家中心主義」と題し分析した。本稿が今回目標とする『小説新潮』の掲載作品から戦後日本社会を分析する試みは、特に戦中の文筆活動が批難され公職追放指定となった作家が数多く執筆している事実 zu 焦点をあて、当時の「政治」システムと「中間雑誌」『小説新潮』での作家たちの創作活動の背景をひも解くことにある。言い換えるなら、「中間雑誌」『小説新潮』が戦後日本の復興と連動して成長した事実と時代的特性に着目し、作家が何を意図して作品を創作していったのか、描かれたものと描かれなかったものなども抽出し、敗戦後の創刊号からの三年間を『小説新潮』における戦後第一期として「戦後史」の一助となることを目的とする。

### 1-2 創刊の背景と成長

『小説新潮』が創刊された背景には、その前身である大衆雑誌『日の出』（1932 年 8 月創刊）

の廃刊（1946年2月）がある。当時の出版界では1946年、日本出版協会による戦争責任追及が一月から始まり講談社、主婦の友社など七社<sup>7</sup>に対し、戦犯出版社として除名・肅清主旨が通達され、さらに翌月の二月第二次として新潮社など十一社が審査の対象とされた。

新潮社はそれより先に『日の出』の廃刊を1946年1月10日に12月号出したのを最後にしてその廃刊を決定し、責任を問われる前に自ら2月28日、当時の役員の交換を行った。出版同志会の除名決議を不当とする出版社は自ら日本出版協会を脱退、新たに社団法人日本自由出版協会を設立したが、新潮社はそれに参加しなかった<sup>8</sup>。

そして、1949年にこの日本自由出版協会が解消し、全国出版協会が結成された際、新潮社は加入した。その二年前に『小説新潮』は創刊されるわけだが、当時は新雑誌の創刊が認められず、競馬雑誌の権利を三千円で買い、出版協会に企画届をだし、六十四頁、二万部の用紙の割り当てをもらって刊行される<sup>10</sup>。雑誌のタイトルは社内公募によりきめられたという。その雑誌名に関して有名なエピソードが創刊100号<sup>11</sup>に寄せられている。

内田百閒は、『小説新潮』という名前を最初聞いたとき、「これはいい名前だ」と即座に言ったが、「百号を経<sup>けみ</sup>した今でもさう思ふ。四字の一字づつに頭韻<sup>アリテレイション</sup>に似た響きがあり、四字を並べた字面も悪くない」と書き、一方獅子文六は、『小説新潮』なんて、標題からして、ゴツゴツしてるし、小説ばかり陳列したつて、仕様があるまいしと、創刊号を見た時感がへた。（中略）なんだこれは、まるでトンカツ屋のメニュー（ママ）のやうな雑誌だなぞと、悪口をいつた。トンカツ屋へ行くと、トンカツとか、クシカツとか、似たものばかり列んでゐる。スープもデザートもない。何と智慧のない雑誌だと思つた。ところがそれは素人量見で、小説ばかりムヤミと詰め込んだ『小説新潮』が素晴らしい当りをとつたのである。グングンと伸びて止まるところを知らない。汽車に乗ると、誰もが『小説新潮』を読んでる（ママ）。単に大部数を出すのみならず、いつか中間小説といふ文壇の新産物を発明し、その本舗のやうなことになってしまった。（中略）百号の齢<sup>よわい</sup>を迎へ、智慧がないと思つた『小説新潮』の題名もソノモノズバリの気がするやうになったのは、慎重社（ママ）の慎重事業の勝利であると、慶賀に堪へないのである」と書いている<sup>12</sup>。

## 2 出版界と『小説新潮』

### 2-1 『出版年鑑』における『小説新潮』

『小説新潮』の創刊当時出版された雑誌は、2545点<sup>13</sup>、翌年6778点<sup>14</sup>、1949年には5242点<sup>15</sup>となっている。後で詳しく省察するが当時の出版データを『日本出版年鑑』<sup>16</sup>（協同出版社）またはその後改名された『出版年鑑』（出版ニュース社）で確認すると、『小説新潮』は1952年まで「大衆雑誌」に分類され、翌1953年の『出版年鑑』（出版ニュース社）からは「文藝・文学」に分類されている<sup>17</sup>。その後は一貫してこの『出版年鑑』に関して『小説新潮』は、1965年まで調査したかぎりではこの分類で掲載されている。

敗戦後、「中間雑誌」が純文学、大衆文学作家たちの作品の発表の舞台となり、大衆向けの娯楽作品が大量生産された影響もあり、中間小説の形態に関する議論が文壇においても活発に交わされるようになる。中間小説言説は久米正雄が雑誌『新風』（大阪新聞東京支社、1947年4月号）

において林房雄の書くこのごろの作品を指した発言によるものであるが、出版界では、中間小説なる言葉が登場するのは1952年（昭和27）が初めてである。

当時の出版状況をまとめた『出版年鑑』（出版ニュース社）では、雑誌の「年間史概観」と題された解説箇所に中間小説なる言葉が確認できる。以下はその引用である。

「『文藝春秋』がますます高級娯楽性を加えて広汎な読者層に食い入り、部数の点では、大衆誌と肩を並べる唯一の総合誌になっている。この傾向は多少にかかわらず、他誌にも影響して『中央公論』『改造』など部数を伸ばして来た。『新潮』また（ママ）従来の文芸誌の枠を広げて広汎な読者層を獲得することに成功した。こうした傾向はいわゆる中間小説（傍点筆者）で文芸誌との断層をねらった『小説新潮』『小説公園』などが若い階層を中心に確実な地歩を占めてきたこととともに雑誌界の大きな動きを示すのであろう。（後略）」

「第一篇年間史B雑誌」『出版年鑑 1952年版』（出版ニュース社）13頁より抜粋。

この「総合・文芸誌」の欄において、『昭和22・23年版日本出版年鑑』（日本出版協同株式会社刊）<sup>18</sup>では、当時出版された書籍・雑誌の概観や、統計が出されたものであるが、雑誌の分類を、34部門に分け、部門別に統計がなされている。

『小説新潮』の分類は、当時雑誌部門における「大衆娯楽」雑誌欄（傍点筆者）に記述を見つけることができ（表1の上から5番目）、そこでは大衆雑誌を四つにグループ分けをしている。

それらは、（1）読物娯楽雑誌、（2）文芸誌、（3）総合啓蒙誌、（4）探偵小説誌等となり、

表1【雑誌部門別統計（日本出版年鑑編集部）】

雑誌名	冊数	雑誌名	冊数
総合時局雑誌	81	語学雑誌	31
外国事情研究雑誌	46	科学技術雑誌	35
地方一般雑誌	100	理学雑誌	44
地方新聞雑誌	56	工学工業雑誌	107
大衆娯楽雑誌	55	農学農業雑誌	106
婦人雑誌	41	医学薬学雑誌	78
少国民雑誌	64	文芸一般雑誌	155
哲学宗教雑誌	81	詩雑誌	25
教育雑誌	83	短歌雑誌	46
歴史・地理雑誌	15	俳句川柳雑誌	60
国家社会雑誌	42	美術雑誌	30
政治思想国体雑誌	34	芸能雑誌	69
法律法学雑誌	25	生活健民趣味雑誌	64
経済一般雑誌	31	勤労国体雑誌	80
経済国体雑誌	33	文化国体雑誌	51
経済学雑誌	14	特殊雑誌	9
経済資料雑誌	20	学生新聞雑誌	10
		計	821

出典：「出版諸統計」『日本出版年鑑 昭和22・23年版』75頁。

『小説新潮』を（２）文藝誌のグループに分類している。

このグループに併記された他の雑誌としては『小説と讀物』（櫻菊書院）、『大衆文藝』（新小説社）であるが、『小説と讀物』を「本格小説を旗印として作品一本槍の力作を集め…（後略）」<sup>19</sup>と解説され、『大衆文藝』では、「真摯な大衆作家の道場として注目され」<sup>20</sup>と評されている。

つまり当時『小説新潮』の出版界における位置づけも上記二つの雑誌に対する編集者側の評価を考えると、その特徴が本格小説と大衆小説の中間的小説が掲載された雑誌として取り扱われていることが分かる。しかし雑誌分類では、1947～48年の『小説新潮』は「大衆娯楽雑誌」であるという文壇との扱いかとは必ずしも一致していないことが分かる。そして同年鑑の9年後の1951年（昭和26）には、『小説新潮』が、「文芸」の目録欄に列記され<sup>21</sup>、「中間雑誌」という分類は現在発行されている同年鑑では項目としては存在しない言葉となっている。

## 2-2 『雑誌新聞総かたろぐ』と『小説新潮』

出版界における中間雑誌の分類は、出版社によって違いがある事が分かる。メディア・リサーチ・センター社発行の『雑誌新聞総かたろぐ』は、1979年創刊の国内で出版されたすべての定期刊行物の概観が可能な年刊であるが、この年刊において『小説新潮』は雑誌の大分類は「文学／文芸誌」欄の「大衆文芸」とされる項目において、中間小説、探偵小説／推理小説、SF、ミステリー、大衆文学が含まれている分類に記載されている。この表示形式は創刊から2014年現在でもその分類は変わっていない。つまり『雑誌新聞総かたろぐ』における『小説新潮』の位置づけは、「大衆文芸」におかれ、前述した『出版年鑑』の1951年以降の分類における「文芸」は同一だが、『雑誌新聞総かたろぐ』では『小説新潮』の分類に「大衆」の二文字が付され、さらに中間小説として列記されている。1955年以降の高度経済成長に伴い、徐々に多岐にわたる種類の雑誌が創刊され1970年代末に創刊された『雑誌新聞総かたろぐ』では、より時代に即した雑誌分類の細分化がされているといえる。

## 3 「政治」と『小説新潮』

### 3-1 火野葦平作品について

読み切りで風俗小説に分類される作品が多く掲載される第一期では、火野葦平、林房雄などが共に敗戦後戦中の文筆活動が非難され1948年公職追放指定<sup>22</sup>をうけている。その後、火野は1950年10月に追放が解除されるが、当時公職追放指定を受けた作家の文筆活動は大手の出版社への寄稿が認められなかっただけで、新潮社は積極的に二人の作品を掲載している。本章では火野と林を取り巻く当時の「政治」に焦点をあて彼らの作品から戦後日本社会の考察を試みる。

火野葦平（1907-1960）が、第一期において読み切り作品を掲載した作品の数は8作品にのぼる。この作品群のなかで第一番目に登場する「昼狐」（1947年11月号：第1巻第3号、章末における表2を参照）は、巻頭ページに掲載され新潮社の火野に対する期待の大きさを物語っている。主たる登場人物は、加助、親友の留吉、おでん屋の女将お仙であり、場所の設定は火野の故郷である北九州市若松を舞台に繰り広げられる。通常『小説新潮』における読み切り作品の場合、作品ごとに登場人物、舞台背景が異なるものであるが、火野の読み切り作品は連載小説のよ



うに時系列にストーリーが展開しているものが6作品掲載されている。作品の背景は『小説新潮』における本研究の第一期の全てに共通し、闇市場を取り仕切る岡源組のやくざ加助はいつも仕事仲間の留吉と行動を共にし、ケンカも遊びも博打も一緒にする仲の良さは、まるで純粋な子ども時代の親友同士そのままに描かれている。この「昼狐」では、お仙に好意を持つある男が、加助と留吉の存在が邪魔になり、二人に殺し合いをさせようと企むが、二人はこれが「罫」だと気づき、共に協力してことを解決する物語である。「枯木の花」(1948年4月号:第2巻第4号)、「玉手箱」(1948年10月号:第2巻第11号)、「松竹梅」(1949年1月号:第3巻第1号)、「羅生門」(1949年4月号:第3巻第4号)、「馬と鴉」(1949年9月:第3巻第10号)なども、友情、恋愛、義理、人情といった人びとの日常のドラマを、主人公である加助を中心として描かれている。作家自身が自分の故郷を作品の舞台に取り上げることは珍しいことではないが、火野がなぜこの時期に彼の地元を題材に作品を創作していったのか着目するとことで、同時代の彼を取り巻く社会状況が浮かび上がる。第一に火野は当時文壇から遠ざかりつつある自分の境遇を嘆いていた。「兵隊三部作」時代彼と関係の深かったある出版社の社長Y氏に借金の申し込みを何度かしたがいつも玄関払いで追い返されたことが『火野葦平選集第五巻』の巻末月報に述べられている<sup>23</sup>。戦中に好意的だった出版社から手のひらを返したような扱いを受けたこと、そしてその社長が「火野君はもう終わった」など会う人に語ったことなどを耳にした火野は孤独を感じ、より一層地元への愛着を膨らませるきっかけになったと考える。彼が青年時代まで家族に囲まれ安心して生活できた空間を当時の作品の舞台に選んだことは当時の火野の孤独感の象徴である。同時に若松を舞台にすることで、地元の住民とのつながりを再確認できる手段でもあったのではないだろうか。作品は全般的に北九州地方の方言でつづられるが、特に「羅生門」では、豊後浄瑠璃を披露する場面が描かれ、それは昔から伝わる地元伝統芸能であり今では地元民も使わない方言で語られる。これは火野が根っからの北九州人であることを強調させ、明らかに地元の読者を強く意識した作品として読むことができる。博打と喧嘩に明け暮れ、義理人情に篤い主人公はまさに当時の「政治」が混沌とした社会での正義漢として描かれ、庶民の味方、頼れる人物像を呈している。これは火野自信が地元でそうありたいと願う彼の理想が投影されているのである。また、この一連の作品では必ずやくざ同志の喧嘩をする場面が登場する。火野は「戦犯作家一号、又は二号か」と言われ真っ先に公職追放指定作家になったが、このいつのまにか彼をそのような境遇に陥れた目に見えない「力」に憤りを抱え、見えない敵と喧嘩をしたかったのではないだろうかと考えることもできる。火野に内包された孤独感を『小説新潮』に意欲的に作品を供出することで埋め合わせをしていった結果だったのである。

### 3-2 林房雄作品について

火野葦平より4歳年上の林房雄の作家としての背景は、「偽善者の言葉」『林房雄著作集2』(翼書院, 1969年)の中で自身の経歴を分かりやすく端的に述べている。そこで彼自身、自分のこれまでの創作ならびに思想活動を「私は学生の頃共産主義に走り、その後、いわゆる“プロレタリア作家”として活動し、二度の入獄の後に共産主義より脱出を開始し、五年程前に『転向について』という一文を発表して共産主義に公然の挑戦を行い、やがて“日本主義”を旗印とする諸団体の間を放浪して、それらの主義にも徹することができずに今日に至った、きわめて無節操な

外見の経歴の持ち主である。』<sup>24</sup>と表現している。ここで林は常に何かの「主義」に頼らなければならなかったことを「精神の脆弱を証明する以外の何ものでもない」<sup>25</sup>と自己分析しているが、同書の第3巻の「解説」を書いた名和一男は、林の思想の変遷を「素直な」人物と評価し、「転向について」林が書いている転向者として自身を内省するまなごしの冷静さを高く評価している。丸山真男と梅本克己は『現代日本の革新思想』（河出書房新社、1966年）での対談で、林房雄の論客としての素晴らしさを、彼が中央公論に連載した「大東亜戦争肯定論」を引き合いに出し「肯定」という言葉の使いかた、当時のいわゆる文化人（リベラリスト、マルクス主義、プラグマティストなど）のナショナリズム派とデモクラシー派の中にくさびを打ち込もうとしていると述べる<sup>27</sup>。

林房雄の従軍経験は1937年日中戦争時、中央公論社の特派員としての上海戦線である。砲撃中の上海虹口地区に二週間籠城し駆逐艦に運ばれて帰国し、帰国後機関誌「新日本」を発行、戦争肯定と愛国主義的態度をあきらかにした。戦後彼は敗戦を鎌倉の自宅で迎え、原稿の依頼が激減し栄養失調一歩手前まで行ったという経験を持っている。林の場合GHQの追放を受けない前に、1946年ジャーナリスト会議によって追放され、後に正式に追放指定をGHQから受けたかたちとなる。戦後は当時偶然列車の中で出会った大衆文芸雑誌編集者の夏目伸六から『小説と読物』に書かないか誘われたのをきっかけに大衆雑誌に作品を書いていくようになる。

本研究で第一期と時期区分した『小説新潮』に掲載された林の4作品は、「棒府の易者」（1947年12月：第1巻4号）、「昔の恋人」（1949年2月：第3巻2号）、「南京の女」（1949年5月：第3巻6号）、「賭博物語」（1949年9月：第3巻10号）であるが、そのうち「棒府の易者」と「賭博物語」は中国を舞台とした作品であり、「昔の恋人」と「南京の女」はタイトルが示すように、彼の青春時代の恋人の話、そして上海の租界地で出会った日本の芸者の戦後に再会する物語である。林の作品は同時代的なものとそうでないものが存在し、それによって、彼が当時作品に対して彼自身の心境を見えにくくさせている一方、そのことが彼が当時の「政治」に無関心であるかのように装う林特有の表現方法と見ることができる。火野と同様に文筆家追放指定を受けた林だが、二人の『小説新潮』から読み解ける心理は対照的であり、同時代の表の「政治」から一歩退いた作家の裏の「政治」としてひも解ける。

### 3-3 描かれなかったもの

同時期に『小説新潮』に作品を掲載された火野葦平と林房雄であるが、ふたりの作品に共通して描かれなかったものが当時の戦後日本社会を取り巻く「政治」そのものである。先述の通り二人は文筆家追放指定を受け、「政治論文」に関する執筆はきつくGHQから禁止されていた。火野の作品に関しては、戦中時代の作品とは打って変わり、戦後に多くの帰還兵が日本国内に存在していたはずであるが、元日本兵の姿すら作品に登場していない。彼の作品背景は、主に北九州の地元若松を日常生活の中心とした人々の人間模様を主軸に展開する。

林は上海で出会った日本人の芸者を作品に登場させているが、戦地での体験としてではなく当時のメディアの情報戦略の本部がある上海での友人たちとの社交場での出会いである。それは明るく軽いタッチで描かれ戦争の落とす影としては、その芸者が日本に帰国し年老いてすっかり様変わりしている様子が叙述されている。

さらに二人に限らずこの第一期の作品においては広島や長崎に投下された原子爆弾についての作品ならびに当時日本の各地に散らばっていた占領軍の姿が描かれた作品は皆無に等しく、触れられていても一行ほどのものである。当時は厳しい検閲により原子爆弾の被害が正確に伝わることは難しく、検閲の影響もさることながら当時の日本の知識人を始め大衆にすら原爆による被害の状況を正確に把握することができなかったことの事象として捉えられる。さらにこれらが作品に書かれなかったことは、第一期は戦後三年間という戦争記憶が新鮮な期間でもあり、その敗戦の現実をどのように当時の人々が内面で受け止め、軍国主義から民主主義に急転回した政治状況の変化に戸惑っていることの表れと考える。日常の娯楽を『小説新潮』に求める読者にとっては、日々の生活の苦しさを忘れさせてくれ、彼ら・彼女らの心の負担を軽くし明るい気持ちにさせてくれる作品が好まれていたのである。

### 3-4 公職追放と『小説新潮』

火野葦平、林房雄が当時公職追放指定 をうけていたにも拘わらず、二人の作品は、他の作家と比較すると積極的に作品が掲載されている。その理由として第一に、『小説新潮』が創刊当時競馬雑誌の権利で出版協会に届け出を出していたことが、当時の事前検閲にかからなかったことも影響しているのではないだろうか。第二の理由として、出版社側の商業目的としての当時戦争責任が問われていた作家を起用することにより、読者の注目を集めるための広告塔として起用したと考えられる。というのも「創刊の言葉」に記されているように、新潮社は啓蒙的な言葉として「(前略) 娯楽としての新生面を開くと共に、近代小説の使命たる人生の教師としての役割(後略)」<sup>29</sup>と当時の編集長である佐藤俊夫の言葉から分かるように、戦中の言論弾圧、軍の意向で戦地に派遣された作家たちを敢えて登用することにより、戦後日本社会に渦巻いていた戦争への憤りや、戦争の実態を知りたいという読者の欲望、或いは従軍作家たちに少なからず「親近感」を抱いている読者を刺激する効果を想定してのことだと考えられる。つまり敗戦をきっかけに軍国主義から民主主義に政治イデオロギーを転向させた表の「政治」に素直に賛同できない戦前の日本を懐古する大衆の見えづらい裏の欲望を満たそうとする『小説新潮』の「政治」でもあると考える。言い換えるなら、敗戦直後の日本社会に渦巻く人びとの国や出版社、作家に対する複雑な感情や気持ちそして欲望を射程にすえ、幅広い読者層を取りいれようとした『小説新潮』の「政治」である。火野は『火野葦平選集第四巻』において「解説」を本人が書いており、そこではこう記している。「當時、私には撥表の場がまるでなかった。食うに困って、おでん屋を計畫したり、友人たちと「九州書房」をはじめたりしていたが、二度と文學をやれるアテはなかった。ジャーナリズムからはボイコットされ、しめだされていた。文壇とは無関係になっていた。しかし私は書かずに居れなかった。(後略)」<sup>31</sup>。このように作家の立場からも経済的窮乏を埋めるための創作活動ともいえなくはないが火野の場合、出征前に投稿した『糞尿譚』が第六回芥川賞を受賞し、その受賞式は戦地で行われた。その後陸軍からは、従軍作家として徴用され従軍中に執筆した「兵隊三部作」などは当時 300 万部を超えるベストセラーとなる。『土と兵隊』に至っては映画化され大ヒットを記録することとなり当時の戦意高揚を推し進めるものとなった。このように戦中の国策により時代の申し子となった作家火野葦平は、戦後民主化路線の中、今度は出版社の「徴用作家」となったともいえる。さらに『小説新潮』では火野の作品を読み切り作



品として掲載しているが、8 作品中 6 作品が同じ登場人物、舞台設定で作品が編まれていることは上述のとおりである。これは新潮社が当時の「政治」を伺いながら火野作品の掲載を柔軟に対応できるための手段だったのではないかと推測できる。

#### 4 終わりに

拙稿において、1947 年 9 月の創刊から 1949 年 12 月を戦後日本社会における『小説新潮』の第一期と時期区分したことを踏まえ、本稿では当該期の掲載作品から『小説新潮』から新しく構築できる「戦後史」の省察を行った。戦後における中間小説、そして「中間雑誌」のメディアとしての位置は、文壇と出版界において違いがある事を提示した。文壇においては、敗戦の 2 年後には、久米正雄による中間小説の言説がはじまったが、出版界においては、5 年遅れての 1952 年に中間小説なる言葉が『出版年鑑』において『小説新潮』を解説する際に使われ始めた。出版当初の『小説新潮』は、「大衆雑誌」に分類されるが、1951 年には「文芸」の目録に記載されるようになる。このように、第一期における『小説新潮』の浮動的な立場が概観できたが、創刊当初も、当時日本出版協会による戦争責任の追及をさせて、事前に対処し、1947 年から 1948 年にかけての雑誌の乱立する状況のなかで足場を固めていくことができたのである。

第一期の『小説新潮』を「政治」を切り口に行った分析では、当該期最も掲載作品本数の最も多かった火野葦平、その次に多い林房雄に焦点をあて省察した。当時火野、林の両氏は公職追放指定を受けたにもかかわらず執筆活動を行っていた。その背景には創刊当時新潮社が雑誌の権利を競馬雑誌で日本出版協会に提出していた事実や、公職追放指定者は大きな出版社への執筆が認められなかったということや「政治論文」以外は書いてもいいとされる処分だったからである。さらには敗戦後、新潮社は『小説新潮』を啓蒙雑誌として位置付け、商業目的のため火野の作品によって広い読者をターゲットに様々な敗戦後の日本社会に渦巻く人びとの感情を刺激するための起用と捉えることができる。さらに新潮社も当時の「政治」システムに柔軟に対応できるために火野の読み切り作品が登場人物、舞台設定が同一にも拘らずその作品群を連載扱いではなく、読み切りで掲載されたいことも当時の新潮社による「政治」的な対応の一つとして提示した。

火野、林の描かなかったものの中に、戦争そのものの描写がなかったことを考察したが、その背景には GHQ による検閲の影響もさることながら、やはり戦中での行いに対して処罰されたことに加え、当時はまだ二人の戦争、敗戦経験が自らに及ぼした現実に対する気持ちの整理をする時期として捉えられる。二人の作家に限らず『小説新潮』の第一期の作品には当時の原子爆弾のことや GHQ の占領兵士の姿はほとんど語られない。そのこと自体も『小説新潮』における戦後第一期の大きな特徴として明らかとなった。

『小説新潮』を素材に本稿では第一期における掲載作品から新しい「戦後史」の構築を試みたが、今後の課題としては分析対象期間を 1965 年までに広げ、「中間雑誌」『小説新潮』から「政治」を切り口に考察できる「戦後史」の歴史叙述の第二期～第四期までを今後の研究課題としたい。

付記 本稿は、2014 年度日本女子大学大学院生特別研究奨励金の研究成果の一部である。

\* 本資料における旧漢字は本文において（引用の除く）新漢字に改めて記入した。

表2 第一期『小説新潮』読み切り・連載作品リスト

## 凡例

1. 火野葦平・林房雄の作品には網掛けを施した。
2. 旧漢字は新漢字に改めて記入した。
3. 当該期における『別冊小説新潮』は除外した。

発行年	巻・号	月	作品名	分類	時代	作家
1947(昭22)	1巻1号	9月	風雪	風俗	戦後	石川達三
			砂手本	風俗	戦前	里見弴
			満月	時代風俗	時代小説	長谷川伸
			あしのうら	恋愛	戦後	舟橋聖一
			橘や	恋愛	明治時代	邦枝完二
	1巻2号	10月	続・雪国	恋愛	1930年代中ごろ	川端康成
			放浪亭主人	風俗	戦後	林芙美子
			こころ妻	風俗	戦後	井上友一郎
			橘や	恋愛	明治時代	邦枝完二
			風雪	風俗	戦後	石川達三
			悪の華	恋愛	戦後	南川潤
	1巻3号	11月	昼狐	風俗	戦後	火野葦平
			河内山	風俗	戦前	尾崎士郎
			青春の門	風俗	戦中戦後	京都伸夫
			男女	風俗	戦後	北原武夫
			橘や	恋愛	明治時代	邦枝完二
			風雪	恋愛	戦後	石川達三
	1巻4号	12月	棒府の易者	推理	時代小説	林房雄
			旅の涯	社会	戦後	北條誠
			柚子の花	風俗	時代小説	土師清二
			橘や	恋愛	明治時代	邦枝完二
			風雪	恋愛	戦後	石川達三

年	巻・号	月	作品名	分類	時代	作家
1948(昭23)	2巻1号	1月	断崖	恋愛	戦後	阿部知二
			媚薬	サスペンス	戦中の北京	川口松太郎
			石中先生行状記—隠退蔵物資の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			橘や	恋愛	明治時代	邦枝完二
			舌の賽コロ	風俗	時代小説	長谷川伸
			雪夫人絵図—白狐の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
	2巻2号	2月	太閤さん	風俗	戦後	林芙美子
			掛布団	風俗	戦後	森山啓
			石中先生行状記—隠退蔵物資の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			善人伝	風俗	戦中	船山馨
			橘や	恋愛	明治時代	邦枝完二
			雪夫人絵図—桃の実の巻—	風俗	戦後	舟橋聖一

	2 巻 3 号	3 月	眉山	風俗	戦後	太宰治
			残照	風俗	戦後	中山義秀
			朝富士	風俗	戦後	鍋木清方
			橘や	恋愛	明治時代	邦枝完二
			初日	風俗	戦後	北條秀司
			雪夫人絵図—章魚の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			石中先生行状記—同窓会の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
	2 巻 4 号	4 月	枯木の花	風俗	戦後	火野葦平
			海風	恋愛	戦中・戦後	真杉静枝
			葉舟先生	エッセイ	戦前	獅子文六
			石中先生行状記—同窓会の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			舞台裏	風俗	戦後	北條誠
			雪夫人絵図—くちなわの章—	風俗	戦後	舟橋聖一
	2 巻 5 号	5 月	柳暗	恋愛	戦後	井上友一朗
			雪夫人絵図—さんさん桜の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			青春	風俗	戦前	梅崎春生
			帰りこし	風俗	戦後	石川悌二
			石中先生行状記—もすもすの巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			面	風俗	戦後	富田常雄
	2 巻 6 号	6 月	カルメン	風俗	戦後	藤澤恒夫
			灰色の裸体	恋愛	戦後	南川潤
			女湯	風俗	戦後	邦枝完二
			石中先生行状記—もすもすの巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			上野介正信	風俗	江戸時代	山本周五郎
			女神	風俗	戦後	池田みち子
			雪夫人絵図—薫風の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
	2 巻 7 号	7 月	神様乞食	恋愛	戦後	火野葦平
			彼の羨望	風俗	戦後	武者小路実篤
			石中先生行状記—エロ・ショ—の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			駱駝の図	風俗	1920 年代	浜本浩
			雪夫人絵図—微薫の章—	恋愛	戦後	舟橋聖一
			回春室	風俗	戦後	石塚喜久三
	2 巻 8 号	8 月	化かされた男	風俗	戦中戦後	尾崎士郎
			狂女	風俗	戦後	椎名麟三
			石中先生行状記—エロ・ショ—の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			雪夫人絵図—雑魚寝の章—	恋愛	戦後	舟橋聖一
			作家の妻の心得	風俗	戦後	深田久彌
			スカヴァンゲルの一夜	風俗	戦後	橘外男

	2 巻 9 号	9 月	浮寝	風俗	戦前・戦中・戦後	藤原審爾
			結婚	風俗	戦後	芝木好子
			石中先生行状記—根っこ町の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			白鬼	風俗	戦後	新田潤
			雪夫人絵図—土蜘蛛の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			続回春室	風俗	戦後	石塚喜久三
	2 巻 10 号	10 月	白髪	風俗	戦後	平林たい子
			日本ロオレライ	風俗	戦後	井上友一郎
			別れ話	風俗	戦後	耕治人
			石中先生行状記—根っこ町の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			その夜の客	風俗	戦後	大原富枝
			雪夫人絵図—緋鯉の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
	2 巻 11 号	11 月	美談	風俗	戦後	阿部知二
			玉手箱	風俗	戦後	火野葦平
			雪夫人絵図—盗人の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			カストリを飲まざるの弁	風俗	戦後	尾崎一雄
			石中先生行状記—林檎景気の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			仮夫婦	風俗	戦中	石塚喜久三
	2 巻 12 号	12 月	不良少女	風俗	戦後	田村泰次郎
			雪夫人絵図—幻の花の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			舞踏	風俗	戦後	南川潤
			石中先生行状記—人民裁判の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			居酒屋銅像譚	風俗	戦後	船山馨

年	巻・号	月	作品名	分類	時代	作家
1949 (昭 29)	3 巻 1 号	1 月	贗作吾輩は猫である	風俗	明治時代	内田百閒
			松竹梅	風俗	戦後	火野葦平
			道ならぬ恋	恋愛	戦後	深田久彌
			欲情街	風俗	戦後	石塚喜久三
			石中先生行状記—髪結い所の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			母	風俗	戦後	上林暁
			いつお前は嫁に行く	風俗	戦前・戦中・戦後	十和田操
			酔い寝の月	恋愛	戦後	真杉静枝
			柘榴おんな	風俗	明治時代	藤原伸爾
			旧友	風俗	戦後	佐藤春夫
	3 巻 2 号	2 月	妻の席	風俗	戦後	丹羽文雄
			水仙	風俗	戦後	林芙美子
			贗作吾輩は猫である 第二	風俗	戦後	内田百閒
			指環	風俗	戦後	新田潤
			石中先生行状記—「子生れの曲録」の由来について—	風俗	戦後	石坂洋次郎



			柘榴おんな（承前）	風俗	戦後	藤原審爾
			桜川善八	風俗	戦後	北条誠
			昔の恋人	恋愛	戦後	林房雄
			第二部雪夫人絵図—雪崩の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
	3 巻 3 号	3 月	ホーデン侍従	風俗	戦後	尾崎士郎
			熱海の踊子	恋愛	戦後	井上友一郎
			陽蔭の花	風俗	戦後	小林達夫
			石中先生行状記—タヌキ騒動の巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			侍堂	風俗	戦後	三島由紀夫
			さめた頬	風俗	戦後	耕治人
			第二部雪夫人絵図—苅萱の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			貧	風俗	戦後	和田伝
			厩作吾輩は猫である 第三	風俗	戦後	内田百閒
	3 巻 4 号	4 月	恋の女	恋愛	戦後	北原武夫
			猿の知恵	風俗	戦後	南川潤
			第二部雪夫人絵図—鬼女の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			花の朝夕	恋愛	戦後	真杉静枝
			羅生門	風俗	戦後	火野葦平
			石中先生行状記—仲たがいの巻—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			鵲	風俗	戦後	中里恒子
			厩作吾輩は猫である 第四	風俗	戦後	内田百閒
	3 巻 6 号	5 月	善夜悪夜	恋愛	戦後	井上友一郎
			南京の女	風俗	戦後	林房雄
			アイ・ラヴ・ユー —石中先生外伝—	風俗	戦後	石坂洋次郎
			園子のマリ	風俗	戦後	太田静子
			うめもどき	風俗	戦後	小田嶽夫
			厩作吾輩は猫である 第六	風俗	戦後	内田百閒
			道中記	風俗	戦後	上林暁
			水曜日の約束	風俗	戦後	新田潤
			雪夫人絵図—松と桜の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
	3 巻 7 号	6 月	おとしばなし李白	風俗	戦後	石川淳
			善夜悪夜 第二回	風俗	戦後	井上友一郎
			片目のドンコ—筑紫艶笑滑稽通信第一信—	風俗	戦後	火野葦平
			不良少女—変貌篇—	風俗	戦後	田村泰次郎
			閑古鳥	風俗	戦後	伊藤永之介
			雪夫人絵図—二本柳の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			磯の玉藻	風俗	戦後	檀一雄
			通妻譚—「酒徒行伝」第四話	風俗	戦後	船山馨
			厩作吾輩は猫である 第七	風俗	戦後	内田百閒
	3 巻 8 号	7 月	湖上の薔薇	風俗	戦後	藤原審爾
			隠れた入江	風俗	戦後	中山義秀

			オール・ナイト	風俗	戦後	宮内寒彌
			善夜悪夜	恋愛	戦後	井上友一郎
			肉体の履歴	風俗	戦後	池田みち子
			贗作吾輩は猫である 第八	風俗	戦後	内田百閒
			うつむいた女	風俗	戦後	壺井栄
			雪夫人絵図—黒い魚の章—	風俗	尊後	舟橋聖一
	3 巻 9 号	8 月	臚 (はなむけ)	恋愛	戦後	北原武夫
			ある夫人の像	風俗	戦後	小田巖夫
			湖上の薔薇 (第二回)	風俗	戦後	藤原審爾
			贗作吾輩は猫である 第九	風俗	戦後	内田百閒
			ホーデン侍従—劇作「新日本笑府」真夏の夜の夢—	風俗	戦後	尾崎士郎
			善夜悪夜	恋愛	戦後	井上友一郎
			ボンチ画の英雄	家族	戦後	芹澤光治良
			雪夫人絵図—雨滴れの章—	風俗	戦後	舟橋聖一
	3 巻 10 号	9 月	かれ毎日欲情す	風俗	戦後	獅子文六
			賭博物語	風俗	戦後	林房雄
			雪夫人絵図—蛸の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			焰の構造	風俗	1920 年代・戦後	十和田操
			湖上の薔薇	風俗	戦後	藤原審爾
			秋の日の望楼で	風俗	戦後	小田巖夫
			馬と鴉	風俗	戦後	火野葦平
			善夜悪夜	恋愛	戦後	井上友一郎
			贗作吾輩は猫である 第十	風俗	戦後	内田百閒
	3 巻 11 号	10 月	新興階級	風俗	戦後	深田久彌
			尾上菊五郎	風俗	昭和初期	邦枝完二
			善夜悪夜—泣いてみたとて—	風俗	戦後	井上友一郎
			蛇と狂人	風俗	戦後	田中英光
			雪夫人絵図—白拍子の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			最初の抗議	風俗	戦後	小谷剛
			湖上の薔薇	風俗	戦後	藤原審爾
			矛盾	風俗	戦後	長與善朗
	3 巻 13 号	11 月	キティ台風	風俗	戦後	里見弴
			魔の夜	恋愛	戦後	上林暁
			雪夫人絵図—山霧の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			赤い絨毯	風俗	戦後	耕治人
			善夜悪夜	風俗	援護	井上友一郎
			贗作吾輩は猫である 第十二	風俗	戦後	内田百閒
			沙漠の花	風俗	戦後	平林たい子
			長篇 暢気眼鏡	風俗	昭和初期	尾崎一雄
			湖上の薔薇	風俗	戦後	藤原審爾
	3 巻 14 号	12 月	おんなごころ	風俗	戦後	井伏鱒二
			雪夫人絵図—明鳥の章—	風俗	戦後	舟橋聖一
			たんぼぼ	風俗	戦後	佐多稲子

			長篇 暢気眼鏡	恋愛	戦後	尾崎一雄
			小説 坂口安吾	風俗	戦後	檀一雄
			湖上の薔薇	風俗	戦後	藤原審爾
			懇親会の果て	風俗	戦後	今日出海
			善夜悪夜（終回）	恋愛	戦後	井上友一朗

- 1 1947年5月～1949年4月・全21冊、発行所は第二号から日本小説社。当時中間小説誌と呼ばれることに異を唱える。
- 2 千葉大学における「中間小説誌の研究」プロジェクトが小嶋洋輔を中心に2013年より始まっている。
- 3 例えば佐藤卓己『「キング」の時代—国民大衆雑誌の公共性—』（岩波書店、2002年）
- 4 坂本博志『「平凡」の時代』（昭和堂、2008年）、成田龍一『「平凡」とその時代』『戦後日本スタディーズ40・50年代』（紀伊国屋書店、2009年）
- 5 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌—教養メディアの盛衰—』（創元社、2014年）。ここでは記述した雑誌以外に、『婦人公論』『暮らしの手帖』『朝日ジャーナル』『ニューズウィーク日本版』『諸君！』『流動』『放送朝日』＜ネット論壇＞などが論壇の公共圏におけるメディアとして取り上げられ、十一人の執筆者による論文が収められている。
- 6 岩元省子『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第20号、（日本女子大学、2014年）53～66頁。
- 7 その他の五社は、旺文社、家の光協会、第一公論社、日本社、山海堂であった。
- 8 『新潮社100年』（新潮社、2005年）114頁。
- 9 前掲。
- 10 前掲書（新潮社、2005年）121頁。
- 11 「創刊百号に寄す」『小説新潮』（新潮社、1954年10月記念号）第8巻（13号）24～25頁。
- 12 前掲。
- 13 『出版データブック1945-2000』（出版ニュース社、2002年）8頁。
- 14 前掲書、10頁。
- 15 前掲書、12頁。
- 16 『日本出版年鑑』は1940年代から50年代にかけて出版社を3回変更している。1943年版（昭和18）は協同出版社発行。1944、45、46年版（昭和19、20、21）と1947、48年版（昭和22、23）は『出版年鑑』とし出版ニュース社発行となる。
- 17 「第三編年間史概観・総合・文藝雑誌」『出版年鑑』（出版ニュース社、1953年）4頁。
- 18 戦後『日本出版年鑑』は、出版社名を二度変更している：協同出版社（1943年版（昭和18年版）→日本出版協同株式会社（1944、45、46年版（昭和19、20、21）、1947、48年版（昭和22、23）。1949年は出版されず、1951年にタイトルを『出版年鑑』として出版ニュース社から復刊される。
- 19 『昭和22・23年版日本出版年鑑』（日本出版協同株式会社、1947、1948年）24頁。
- 20 前掲
- 21 「雑誌目録」『出版年鑑1951年版』（出版ニュース社、1951年）814頁。
- 22 当時文筆家の公職追放指定者は355名に登る。
- 23 火野葦平「選集編纂にあたって」『火野葦平選集第五巻』（創元社、1958年）巻末月報。
- 24 林房雄「偽善者のことば」『林房雄著作集2』（翼書院、1969年）42～43頁。
- 25 前掲書、43頁。
- 26 林房雄「大東亜戦争肯定論」『中央公論』（中央公論社、1963～65年）。のちに番町書房から1964～65年出版。

- 27 梅本克己・佐藤昇・丸山眞男『現代日本の革新思想・上』（岩波現代文庫，2002年）
- 28 当時文筆家の公職追放指定者は355名に登る。
- 29 『小説新潮』（新潮社，1947年9月）表紙裏。
- 30 1946年創業，1948年莫大な赤字のためつぶれる。（「年表」『火野葦平選集第八巻』544頁。）
- 31 火野葦平「解説」『火野葦平選集第四巻』（東京創元社，1958年）430頁。

#### 【参考文献】

- 尾崎秀樹『大衆文学』（復刻版）（紀伊国屋書店，2007年，初版：1964年）
- 尾崎秀樹・宗武朝子『雑誌の時代—その興亡のドラマ—』（主婦の友社，1979年）
- 木本至『雑誌で読む戦後史』（大進堂，1985年）
- 阪本博志『『平凡』の時代—1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち—』（昭和堂，2008年）
- 佐藤卓己『『キング』の時代—国民大衆雑誌の公共性—』（岩波書店，2002・2012年）
- 『日本出版年鑑 昭和22年・23年版』（日本出版共同株式会社，1948年）
- 『出版年鑑』（出版ニュース社，1953年）
- 『新潮社100年』（新潮社，2005年）
- 『新風』（大阪新聞東京支社，1947年4月）
- 『日本近代文学大辞典』（講談社，1984・1990年）
- 『出版データブック』（出版ニュース社，2002年）
- 『読者世論調査30年 戦後日本人の心の軌跡』（毎日新聞社，1977年）
- 竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌—教養メディアの盛衰—』（創元社，2014年）
- 成田龍一「『平凡』とその時代」『戦後日本スタディーズ』岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編（紀伊国屋書店，2009年）
- 『林房雄著作集2』（翼書房，1969年）
- 『火野葦平選集1～8』（東京創元社，1958年）
- 福島鑄朗『雑誌で見る戦後史』（大月書店，1987年）
- 山本明『思想としての風俗』（朝日新聞社，1974年）